

2008年から2009年にかけて、学究生活のまとめとリフレッシュ&体力回復のため、思い切って1年間のサバティカル休暇を取りました。その間、後半の2009年4月～8月下旬までの約5ヶ月間、New Zealand オークランド大学 (University of Auckland: U of A) 教育学部保健体育 (PE) で、水中安全および水泳の指導実践などに長年従事されている Dr Kevin Moran 氏と共同研究を行うことができました。また、2010年3月にも10日間の研究打ち合わせで行ってきました。

1) はじめての南半球での生活

オークランドはNZの北島に位置し、市街地は北のワイテマタ湾と、南のマヌカウ湾に跨る地峡地帯。穏やかで美しい海岸線に恵まれています。この地域はNZの総人口(430万人)の1/3の140万人の最大都市圏です。日本と同じ火山国のため、変化に富んだ自然が多く残っており、丘陵地帯にはヒツジと牛の牧場が多く見られます。そのため人間の数より多いと言われますが、まさにその通りです。筑波大学の高木先生は南島のダニーデンはオタゴ大学で在外研究員として滞在していました。



NZは、Outdoor Sportsに適したフィールドが多様であり、学校教育のカリキュラムにも取り入れられています。その自然保護には国家レベルでの対策が講じられています (DOC: Dept of Conservation)。市街からは“City of Sails”と呼ばれる Harbour が一望できます。ヨットの America’s Cup の舞台としても有名です。温暖な亜熱帯性気候のため、大変過ごしやすく、冬に雪は降りません。今回の滞在期間中は季節が日本とは逆で、初秋から冬。一番悪い時期に来たと言われました。冷たい雨の日が多くありました。また、北と南が逆になり、日当たりのよい北向きの部屋?となります。

U of A は City, Epsom, Tamaki Campus の3つに分散し、教育学部は Epsom にあります。City からバスで西に15分。2004年、旧オークランド教育大学 (Auckland College of Education) はオークランド大学教育学部に発展的に吸収合併され、Critical Study in Education (複合領域: 教育学, 社会科学, 保健体育, 太平洋地域教育) となっています。皆クリスティと呼んでいます。



NZ は南太平洋系，東洋系，中近東系の移民などに積極的であり，この大学も多様な人種のルーツです．先住民はマオリ族と言われる南太平洋から入植した人達ですが，19世紀以降，英国系の人達が多くを占め，場所によってはビクトリア調の面影を残す建物が見られます．公用語は英語とマオリ語．教育システムも2通り．学生の教育実習も一般校とマオリの両方を必修としています．ここオークランドでは色んな国の人達とすれ違い，今まで聞いたことのない言語が飛び交います．従って，食文化も非常にバラエティに富み，中華，韓国，東南アジア，インド，中近東，ポリネシアンなど食材も豊富で，日本食品も手に入ります．驚いたことに魚を生で食べる人達が多く，魚屋には切り身の刺身が売っており，新鮮でおいしい鯛，マグロ，フェダイなどが手に入ります．ほぼ日本と同じ食生活ができるので大変重宝しました．当然のことながら，これに合うビンテージものワインがスーパーマーケットで廉価で手に入ります．また，日本で高価なトロピカルフルーツのフィジョア (Feijoa) も一般家庭の庭先で採れます．アパートは City Campus の直ぐ近く．僅か5分も歩けば大きな公園，Auckland Domain があります．市街地から少し入っただけで静寂の森の中へすっぽりと入り，元火口が広いフィールドになっていて，寝ころんで本を読む人もあれば，ジョギングやお年寄りの散歩まで様々です．特に，週末は家族連れでノンビリ過ごしたり，タッチフットボールのクラブチームがあちこちで練習や試合をやっています．

2) サバティカル&共同研究

Dr Kevin Moran 氏は Open Water Safety, Drowning Prevention, Surf Life Saving など，プール以外の海や川などでの水中安全，溺れないためのノウハウ，サーフボードでの救助法などの理論と実践研究を専門とされています．オース



3) Marine Rescue Center & WAI & 水泳教育

トラリアでも Open water でのこのような活動や実践が行われています．それに比べ日本では，泳ぐフォームをよくすることと，サバイバルテクニックの違いが明確になされていません．「泳ぐことよりも溺れないこと」を大切にする文化の違いなのでしょうか？それとも教育内容のとらえ方の違いなのでしょうか？Kevin は40年来 Surf Life Saving に携わり，大学の教員になったスペシャリストですが，彼はメキシコオリンピック (1968年) の自由形の選手だったそうです．バタフライの長澤，平泳ぎの鶴峯各氏の名前を知っていました．NZ 到着翌日には，彼の水泳の授業を早速拝見させていただきました．屋外 25m プールですが，夏でも最高気温が 25℃



位なのでボイラーで温水にしています．

授業終了後，U of A は本学との学術交流協定校でもあるので，学科長，学部長との表敬訪問を含め，学生・院生・教職員のさらなる交流，サバティカル中の研究計画 (Can Swim Project) などについて話し合うことができました．2009年の11月には私が会長を務めている日本水泳水中運動学会に Kevin を演者として招き，Building a Water Safety Culture (水中安全文化の構築) と題する水難事故防止策の法令や教育について，また，その介入効果や水難リスクの認識が実際どの程度社会に浸透しているかを NZ の現状を例にして話題提供していただきました．氏の水中安全文化とは，水難事故や溺れることを未然に防ぐ信念，態度，価値観および行動をみんなで共有する教育であるという考え方に感銘を受けた会員は多かったように思います．今後プロジェクトとして U.S.A, Australia, Norway, Korea, Japan などとの国際比較を2010年の6月 Oslo で開催された Biomechanics and Medicine in Swimming 学会で Work Shop を開くまでになり，研究成果の一環として今後も継続して行きたいと思っています．

3) Marine Rescue Center & WAI & 水泳教育

5月のある日、オークランド港にあるMarine Rescue Centerに行ってきました。ここでは、1) Surf Life Saving, 2) Coast Guard, 3) Harbour

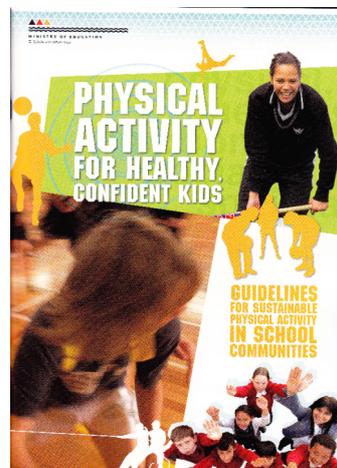


Master, 4) Police/Helicopter Rescueが一カ所に集中され、センターの中央管理棟には人的配置、監視システム、無線オンライン（1~4のすべて）による、中央コントロールシステムを稼働させる体制が整っていました。ここへ連れて行ってもらったKevinが言うには、このようなセンターはアメリカ、オーストラリアなどにもなく世界で一つではないかと自慢していました。特に、夏のシーズンでは事故、遭難状況の情報を一手に集め、最も適した救助、救済方法を中央コントロールシステムで制御し、実働できるようにしています。また、大学医学部の病院にはヘリ



ポートがあり、センターからわずか数秒で到着できます。海の潮汐表、アメダス、北島北部の各ビーチや港湾連絡先のモニター表示、出動体制管理システム（24時間体制：警察、ヘリ、サーフライフセービング要員）などお互いの役割をタテ、ヨコの連繋を取りながら運営されているようです。縦割り行政がまだ残るどこかの国もこれを大いに参考にしてもらいたいと思います。その後、Moran氏が会長のWAI (Watersafe Auckland Inc.)を紹介されました。元校長でKevin

の教え子のJanさんに指導要領（NZ Curriculum 2007）の水泳の扱いが僅か2行（Basic Aquatic Skills）だけであること、具体的な展開や指導プログラムはWAIが携わってWater Safe Teacher's GuideやIAP（Integrated Aquatic Programme）を実行していることを知らされました。これは、0~8歳までの子供を対象とした体系的な水泳学習モデルですが、理論と実技をいつ、どのような学習内容で教えるべきかを段階的に示した冊子です。例えば、Water Sense（水を感じる）から始まり、Water Wise（水を知る）に至るまで泳げるようになることと合わせて、「溺れない」ためのサバイバル技術の徹底的な指導カリキュラム指針となっています。これらは従来の体育授業



が経験則で全て片付けられ、科学的な根拠やシステマティックな授業研究などが行われていなかった弊害を解消するため大きな意義があると強調されていました。先導的なガイドラインが大学や社会のシステムとして必要であると感じました。また、NZ Curriculumにはこころとからだの発育・発達と合わせて、社会および国の一員として育てること：Citizenshipが自分たちの文化を築き上げるという意気込みがあるように思えました。

4) 体育授業：ハカ（HAKA）& 講義
ある日、小生のOfficeの前でハカの練習を学生達がやっていたので、PEスタッフのMikeに頼んで見せてもらいました。彼の小学校体育の教材研究授業のまとめとして、2つのグループに分かれてマオリ伝統文化の芸能パフォーマンスを発表することになっていました。ハカはNZのラグビー代表、オールブラックスなどが試合

4) 体育授業：ハカ（HAKA）& 講義

ある日、小生のOfficeの前でハカの練習を学生達がやっていたので、PEスタッフのMikeに頼んで見せてもらいました。彼の小学校体育の教材研究授業のまとめとして、2つのグループに分かれてマオリ伝統文化の芸能パフォーマンスを発表することになっていました。ハカはNZのラグビー代表、オールブラックスなどが試合



前に鼓舞するマオリ戦士の戦いの踊りです。カメラを構えた小

生の直前まで来て始まりの儀式をやってくれ、迫力のある立派なパフォーマンスで、大変感動しました。続いて、女子学生によるバチのパフォーマンス。なかなか、細かいテクニックとタイミングが必要な演技でしたが、これも見事に成功！拍手喝采。そのあと、全員でバチの演技で歌った歌詞を合唱して終わりました。実技はもちろんのこと、講義でも彼らの授業を受ける態度は真剣そのもの。Kevinの水泳の基礎理論、バイオメカニクス分野の講義を拝聴させていただきました。講義の途中でもわからないことは即座に質問し、納得するまで教員とのやり取りをやっていたのが印象的でした。入学するのは簡単だが、卒業するのは難しく、かなり落とされると聞いた。自分で稼いだお金で授業料を払っているのだから絶対留年はできない。ここにもどこかの学生とは大違い。時間はタイトである。昼食などは学生も教員も30分もない様子。中には3時間目の授業中にリンゴをかじっている。教員は何も言わない。ちょっと考えられないが、お互い「あうん」の了解事項なのか？おもしろいと言うよりも啞然！？これも文化の違いと思えばなんてことないのだろうと変に納得していました。



5) PE スタッフ&テニス仲間

PEのホームページによれば、非常に特徴的な経歴の持ち主ばかりです。ほとんどの人たちが小学校、中学校、高校の先生を10年~20年以上経ってから大学の教員となっています。というよりも、以前のオークランド教育大学がそのようなシステムを組んでいたのではないかと推測され、教員は年配の女性が多く半数近くいます。



仕事は皆てきぱきと要領よくやって、午前のモーニングティー。雑談などなど。昼食はPEの食堂に皆集まってくる。夕方、4:30頃になるとまた、ティータイムでラグビー談義、世間話

で5:00にはさっと家路につく。欧米のスタイルはいつもこんな感じなので、いつ仕事をしているのかと不思議でならない。でも、みんな気さくに声を掛けてくれました。

スタッフの一人、Mikeからテニスクラブに来ないかと誘われ、毎週月曜日の夕方から6~7人の仲間とプレイしました。皆、それぞれ異なった職業の持ち主。6:00頃からWarm Upや練習をして直ぐにダブルス試合、8:00頃終了。



これで着替えて解散かと思いきや、クラブハウスの応接間でもむろにビールを出して飲み出した。勝負のことやその愚痴などは一切話題にならず、ラグビーの話や日常でのことなどをジョークを交えて楽しむというスタイル。和気あいの雰囲気です。次回の再会を期してさっさと解散。これがスポーツの原点と感じさせられました。

6) Aquatic Camp

2010年の3月、再度Can Swim Projectの研究打ち合わせでU of Aに行ってきました。それとは別に体育の集中授業でTawharanui Marine Parkへ行きました。水辺野外活動(Skin Diving, Surfin, Lifesaving, Kayak)とMountain Biking, Orienteering, Recreation Gameなど種目のローテーションをしながら受講者と指導者に別れてキ



ャンプをしていました。1~3年生は参加者、4年生が指導者として1週間前から泊まり込みで準備、計画、運営の打ち合わせを済ませ、キャンプ期間中には全てを取り仕切るシステムで実施されていました。教員はキャンプディレクターとして全体統括と運営にあたる仕組みです。合理的かつ実践的な教師教育システムなので是非



我々も参考にしていきたいと感じました。宿泊は全てテントで寝袋。食事は自炊、トイレは水洗ではありませんでした。自然の厳しさもさることながら、アウトドアライフの原点を体験できました。しかし、4年生のしっかりとしたリーダーシップと教員らしさ？に本当に感心させられた2泊3日でした。因みに教育実習は4年間トータルで40週になるそうです。

7) 最後に

5ヶ月ほどの滞在でしたが、大変貴重な経験をさせて頂きました。我が大学と講座, Dr Kevin Moran に感謝し、今後の活動に大いにフィードバックさせたいと思います。また、水中安全文化という考え方が我が国全体に広がることを期待しています。イギリスの影響を受けてスポーツが一つの文化として根付いている NZ と同じように、我が国も生活の一部として広く国民の中に浸透していってほしいと願っています。

